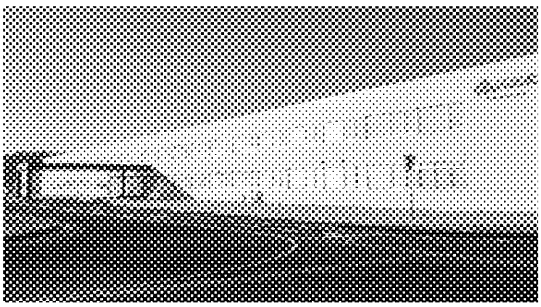
秋田で医療機器ＩＣ

エイブリック、自社生産

半導体需給逼迫にも備え

エイブリック（東京都港区、田中誠司社長）は、アナログ半導体の後工程を手がける秋田事業所（秋田県大仙市）で医療機器向け集積回路（ＩＣ）の自社生産を２０２５年度にも始める。従来、後工程は外部に委託していたが、事業継続計画（ＢＣＰ）の観点でサプライチェーン（供給網）を維持するため、自社工場でも生産することに決めた。数億円を投じて組み立てや検査工程で使う装置を導入する。同社はミネベアミツミ傘下のアナログ半導体メーカー。



医療機器向けＩＣを生産する秋田事業所

生産するのは超音波診断装置に使う送信ＩＣや高耐圧スイッチＩＣ。ＢＣＰのほか、顧客からのマルチソース（調達先の複数化）の要望を受けていた。また、自社生産により生産計画を柔軟に立てられるため、アナログ半導体の需給逼迫（ひっぱく）にも備えられるようにする。

従来は自社内で医療機器向けＩＣを生産できる設備がなかったため外部委託していた。後工程のうち、検査工程で使う設備は導入済みで、量産品の検査を始めた。組み立て工程に使う設備は今後導入し、25年度にも稼働する計画。

エイブリックは9月にソシオネクストのメディカル関連事業を買収すると発表するなど、医療機器向けＩＣに力を入れている。田中社長は「将来的には、医療機器向けＩＣの売り上げを現状の倍に引き上げたい」とし、買収によって売り上げの拡大に弾みをつける。

ミネベアミツミグループは、29年3月期のアナログ半導体事業の売上高を25年3月期見込み比66・7％増の２０００億円にすることを目指している。

無断転載・複写禁止 ㈱日刊工業新聞社